読書通信

第6號
発行人:amagata

読書の秋？　それとも、食欲の秋？

その「両方を」ということで、小説の中での「食べるシーン」を特集します。まずは冒頭から食べるシーンで始まる太宰治「斜陽」です。戦後の没落貴族を描いた作品で、この作品から「斜陽族」という流行語が生まれました。

朝、食堂でスウプを一さじ、すっと吸ってお母さまが、
「あ」
と幽(かす)かな叫び声をお挙げになった。
「髪の毛？」
スウプに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。
「いいえ」
お母さまは、何事も無かったように、またひらりと一さじ、スウプをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、そうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スウプを小さなお唇のあいだに滑り込ませた。ヒラリ、という形容は、お母さまの場合、決して誇張では無い。婦人雑誌などに出ているお食事のいただき方などとは、てんでまるで、違っていらっしゃる。(太宰治「斜陽」)

次に村上春樹です。彼の小説の主人公は実に几帳面に家事をします。丁寧な掃除、アイロン掛けを始め、特に調理の場面を読むと、スパゲッティが食べたくなります。

スパゲッティにしよう、と僕は思った。にんにくを二粒太めに切ってオリーブ・オイルで炒める。フライパンを傾けて油を溜め、長い時間をかけてとろ火で炒める。それから赤唐辛子をまるごとそこにいれる。そしてそれもにんにくと一緒に炒める。苦みの出ないうちににんにくと唐辛子を取り出す。この取り出すタイミングがけっこう難しい。そしてハムを切ってそこに入れ、かりっとしかけるところまで炒める。そこに茹であがったスパゲッティを入れ、さっとからめてみじん切りにしたパセリを振る。それからさっぱりとしたモツァレラ・チーズとトマトのサラダ。悪くない。
(村上春樹「ダンス・ダンス・ダンス」)

＊　＊　＊　＊　＊

〈「読書の記録」より〉

【芥川龍之介「蜜柑」】

短編小説の第一弾は芥川龍之介「蜜柑」です。教科書にも載る有名な作品です。短編ながら、主人公の気持ちの変化がわかりやすい作品だと思います。みんながどのような感想・イメージを抱いたのか、「読書の記録」より一部抜粋してみましょう。

▽この時代の悪い記事や芥川龍之介の疲労や倦怠がつのっていた中で、田舎者の小娘の弟たちに対する小さな優しさが芥川龍之介の心を動かし、すこしばかり疲労や倦怠などを忘れさせていた。(K・A)
▽匂いを使った表現が独特だと感じた。(K・I)
▽灰色のイメージの景色の中に現れるオレンジが鮮烈でした。(T・N)
▽蜜柑のオレンジ色やすすの灰色など色が印象的だった。主人公の印象がトンネルの通過でゆううつから明るくなった。(Y・K)
▽男の人の退屈な人生を少し忘れるほど目の前で温かい光景が起きたんだと思った。(A・O)

【梶井基次郎「檸檬」】

短編小説の第二弾は梶井基次郎「檸檬」です。高校時代この作品を読み、好きになりました。また、学生時代住んだ京都が舞台なので親近感もあります。残念ながら、あの八百屋は少し前になくなってしまいましたが…。いまでも、京都丸善には一年に何個か、檸檬が置かれているそうです。ぼくも「えたいの知れない不吉な塊」に蝕まれています。

▽主人公の私が好きなものをあげて、具体的にどこが好きなのかを説明しているところは読んでとてもわくわくしました。最後、置いていった檸檬が爆発すればいいのにと思う所は、考えただけで面白そうと思いました。(N・I)
▽鮮やかで、繊細な文章でした。写真のような感じで情景が想像しやすかったが、文章の内容が難しかった。(K・W)
▽檸檬が爆発するという発想がすごい。「考えるな、感じろ！」な作品だと思った。(T・S)
▽焦燥や嫌悪という言葉がでてきて、体力や精神の衰えもあって、主人公が物事をややひねくれて受けとっているように感じた。(T・N)
▽ただの檸檬でも気持ちを癒やすことができるように、日常のささいな事・ものが幸せを与えるんだと思った。(K・T)

✐✐✐後記✐✐✐

秋になるとなんとなく心が沈んできて、シャンソンが聴きたくなります。フランス語の鼻音が心を落ち着かせるのでしょうか。また、気持ちが鬱のときのほうが、読書が捗ります。